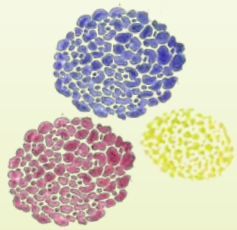
真宗リーフレット１

浄土でお待ちします

真宗大谷派
東本願寺
shinshU Otani-ha
Higashihonganji

生きている
意味がわからないということは
人間にとって
一番深い罪である

蓬茨祖運



真宗大谷派（東本願寺）ホームページ

http://www.higashihonganji.or.jp/

教えにふれる

東本願寺出版

■読みま専科「TOMO ブック」
http://books.higashihonganji.or.jp

■東本願寺電子 BOOK ストア
https://higashihonganji-ebooks.jp/

小松教区ホームページ

http://gunchu-net.jp/

真宗大谷派（東本願寺）
小松教区教化委員会

石川県小松市小馬出町 26（小松教務所内）
☎ 0761−22−0555

「いまはすっかり年をとった私は、あなたに先立ってゆくでしょうから、浄土で必ず必ずお待ちいたしましょう」

八十四歳の親鸞聖人が、とおく離れた関東のご門弟からの疑問にこたえた手紙の最後に、このように記されています。

この世で再び会うことのない門弟に、お浄土でお会いしましょうと語りかけているのは「今」です。その「今」にこそ、出会ってきた時間、語り合った言葉、そして語り尽くすことのできなかった万感の思いが込められているのです。

仏教では時間の流れを「去・来・現」といいます。「過去・未来・現在」という順序です。過去も未来も「今」という現在にあるというのです。言い換えれば、過去は記憶として「今」あり、未来は「意欲―願い―」として「今」あるということでしょう。

自分の記憶に腹を立てるのは「今」です。また後悔して落ち込むのは、やはり「今」です。「後悔のない人生を送れ」と言われることがあります。しかし容易には行きません。

後悔し、罪に苦しむのは健康な心であって、
苦しみにおいて、人間は人間にかえることができる

という言葉があります。人は人に語ることができる問題だけをかかえているわけではありません。人に語ることができない不純粋な問題もかかえながら生きています。

けれども私に先立って生きて下さった人との出会いを通して、生きることの苦しみに共感したとき、不純粋な問題も含めて、自分の人生として受けとることができるのです。その人と出会ってきた時間、言葉、人生全体をいただき直し、あらためて出会い直すことが始まります。自分の人生に方向が決まってきます。

それが「浄土でお会いしましょう」という言葉で尽くされているのです。浄土は死んでから行くところではありません。記憶のなかの人々と「今」出会い直すことのできる場所であります。その方向に歩き続けさせる力を信心と言います。後悔の心をごまかさない力こそ信心であります。信心はありがたいありがたいとよろこぶ心ではありません。生涯をかけて歩いていく方向を見失わない智慧こそ信心です。

真宗リーフレット２

無量寿なるいのち

真宗大谷派
東本願寺
shinshU Otani-ha
Higashihonganji

真宗大谷派（東本願寺）ホームページ

http://www.higashihonganji.or.jp/

教えにふれる

東本願寺出版

■読みま専科「TOMO ブック」
http://books.higashihonganji.or.jp

■東本願寺電子 BOOK ストア
https://higashihonganji-ebooks.jp/

小松教区ホームページ

http://gunchu-net.jp/

真宗大谷派（東本願寺）
小松教区教化委員会

石川県小松市小馬出町 26（小松教務所内）
☎ 0761−22−0555

縁は賜るものであって
自分で
決めることの
できないもの

宮城　顗

古来より人間は不老不死を求めて神や仏に祈り願ってきました。かの秦の始皇帝も不老不死を求めて権力を駆使して秘薬を作りましたが、結局その薬がもとで亡くなったといわれています。いくら望んでも、人間の都合に関係なく命は縁によって生滅を繰り返しています。

それだけではありません。いのちは生まれてくる場所も、時代も、私自身をも選ばせてはくれません。気がつけば今の場所・時代に、この私自身なのです。ある人が死の宣告を受けて「人間は死ぬ日さえも選べないものだな」とこぼされましたが、何一つ人間の自由になることはありません。つまりいのちは人間の分別を超えてはるかに深くて大きいものなのです。

しかし近年、密室にこもり摩訶不思議な光を見たとか、お金を払い秘儀を授かって往生間違いなしという教えがあるそうですが、果たしてどうでしょうか。特殊な経験をすることで悠久なるいのちに手を加えようということなのでしょうか。

滋賀県長浜地方では昔から子どもが生まれたことを「子をもろた」といって喜ばれるそうです。子をもろたとは授かったという意味で、どのようないのちであろうとも仏さまから賜った大事ないのちということです。私ども人間はそのいのちに執着（しゅうちゃく）し計らってしまうところに「迷い」の本質があるのです。その意味では迷いの根本を自覚し、命の世界に帰ることが本来の仏教なのです。

思い通りいかないこのいのちですが、いただいたいのちを縁として仏法を聴聞し、それぞれの場所で花を咲かしていくことが、いのちそのものから願われていることなのです。

真宗リーフレット３

浄土への歩み

真宗大谷派
東本願寺
shinshU Otani-ha
Higashihonganji

真宗大谷派（東本願寺）ホームページ

http://www.higashihonganji.or.jp/

教えにふれる

東本願寺出版

■読みま専科「TOMO ブック」
http://books.higashihonganji.or.jp

■東本願寺電子 BOOK ストア
https://higashihonganji-ebooks.jp/

小松教区ホームページ

http://gunchu-net.jp/

真宗大谷派（東本願寺）
小松教区教化委員会

石川県小松市小馬出町 26（小松教務所内）
☎ 0761−22−0555

いまだ求めようとしないが
求めざるをえない世界が
浄土なのです

蓬茨祖運

平素、法義相続・本廟護持にご尽力を賜り誠にありがとうございます。

私たちは、ひとしく人間としての身を受け、日々の生活をいただいておりますが、愛別離苦、生死流転に出会いますと、日頃聴聞をしていても、理解をしていても、悲しみの涙を禁ずることはできません。この苦しみを出づる道として、親鸞聖人は念仏の教えを明らかにされました。

念仏の教えは、仏の御名「南無阿弥陀仏」を念ずる、称えるという行体をもって得るのですが、阿弥陀如来の衆生を救わんという誓願（教え）を信じ、人生のよりどころを得た喜びの姿です。

身は世間、娑婆を過ごしていながらも、仏の教えを、信心によりいただくことから、往生浄土の道を歩ませられ、御恩報謝の念仏の日々をすごさせていただきます。

浄土への往生を、先人たちは様々な方法で求められました。念仏を称える回数を競ったり、臨終に阿弥陀如来の来迎を求めたり、荘厳の豪華さを競ったりもしました。しかし、教えをいただくことにおいては常に平等です。仏が教えを求める人に対する選びはありません。

私たち人間の心は、日常生活の中で教えをいただく、「在家止住」の身であることから、心は周囲の環境により、とどまることなく変わり、また、世間における善悪の価値観も変化する悲しき状況であります。しかし、時代をこえた、阿弥陀如来の末通りたる念仏の教えにより、人間として生を受けたご縁により、生きながらにして、等しく浄土へ生まれる教えをいただくことができます。

教えにあう機縁をいただいた人は、御恩報謝の日暮しを生き、死の様相に恐れることなく、必ず往生を遂げる喜びの日々を過ごさせていただくのです。

真宗リーフレット４

亡き人を縁として

真宗大谷派
東本願寺
shinshU Otani-ha
Higashihonganji

真宗大谷派（東本願寺）ホームページ

http://www.higashihonganji.or.jp/

教えにふれる

東本願寺出版

■読みま専科「TOMO ブック」
http://books.higashihonganji.or.jp

■東本願寺電子 BOOK ストア
https://higashihonganji-ebooks.jp/

小松教区ホームページ

http://gunchu-net.jp/

真宗大谷派（東本願寺）
小松教区教化委員会

石川県小松市小馬出町 26（小松教務所内）
☎ 0761−22−0555

南無阿弥陀仏は苦しみを誤魔化さず
耐えてゆく智慧と力を
与えてくださるものである

曽我量深

深いご縁を頂いた方が亡くなられたときの寂しさは、言葉に表しようもないものです。「故人に最後のお別れを」、あるいは「ご遺族の方への挨拶を」と、お通夜や葬儀に身を運ぶのでしょう。けれどもそれだけでは終わらない大事な意味がそこにはあります。それは「自分もいつかは最期の時を迎える」ということを確かめる機会だということです。

一度きり授かったこのいのちの中で、自分は一番大事なことに出会っていると言えるだろうか、本当に尊いことに出会っているといえるだろうか・・・そのことを自分に問うてみて欲しいのです。そのような出会いなしに生涯を終わってしまえば、たとえ百年を超えて生きたとしても空しいですよ、そんなことで終わってはなりませんよ、と呼びかけてくれているのが仏教です。

生涯をかけて出会うべき一番大事なこと、それを真宗門徒の先人は「後生の一大事」と名付けました。その中身をたずねてみると、いま自分が授かっているこのいのちに、深く納得することができているかどうかということのようです。なおかつそれは、他者のいのちも最大限に尊重することと裏表です。そのような、お互いの深くて優しいつながりの中を生きることを、浄土真宗では「往生する」と言ってきています。

私たちの誰もが往生することを願っておられる仏さまが阿弥陀如来です。そしてこの願いを浄土真宗では本当に尊いこと（本尊）として戴いています。

真宗リーフレット５

浄土を思う心

真宗大谷派
東本願寺
shinshU Otani-ha
Higashihonganji

真宗大谷派（東本願寺）ホームページ

http://www.higashihonganji.or.jp/

教えにふれる

東本願寺出版

■読みま専科「TOMO ブック」
http://books.higashihonganji.or.jp

■東本願寺電子 BOOK ストア
https://higashihonganji-ebooks.jp/

小松教区ホームページ

http://gunchu-net.jp/

真宗大谷派（東本願寺）
小松教区教化委員会

石川県小松市小馬出町 26（小松教務所内）
☎ 0761−22−0555

仏さまが
たすけてくれるのではなく
南無阿弥陀仏で
たすかるのです

曽我量深

たいせつな人を見送ったとき、私たちは「安らかに・・・」と願い、「ふたたび会うことができれば・・・」と望みをかけます。こういう心を「浄土を願う」といいます。浄土を願う心は、浄土に生まれてからおこすのではありません。現に今、悲しみにくれている「私」が生きている「ここ」でおこるのです。

その心は私がおこすのでしょうか。たしかに私の心におこるのですが、日ころの私の心を考えてみましょう。「損得勘定」「好き嫌い」「たまにはそんな心を離れてのんびりしたい」このような心を行ったり来たりしています。実は、私の生きている所を「三界（さんがい）」といいます。三界とは「欲界（よくかい）、色界（しきかい）、無色界（むしきかい）」の三つです。欲界とは食欲、淫欲、睡眠欲など欲望に振り回される世界です。色界は美術などの美しさを求める心、無色界は哲学などを通して安らぎを求める心と言って良いでしょう。こういう三つの世界を私たちは行ったり来たりしています。美しい器だなぁと思いながらもこれはいくらするのかと考えたり、持ち主を羨んでみたりと、とめどもなく心は動きます。そういうのが私の姿なのです。そんな私に浄土願う心があっても、それがたいへんな心が起こったとは思えないのです。だから、浄土は死んでからの話と言ったり、若いうちには関係ないといってしまうのです。

浄土は亡くなってから往く世界ではありません。有るか無いかを考える世界でもありません。浄土をおもう心に浄土が来ているのです。浄土で安らかにいて欲しいと願う心にたいせつな人は来ているのです。その心は間違いないでしょう。たいせつな人が浄土で安らかにいて欲しいと願う心になったのは、たいせつな人が「仏様」となってはたらきかけて下さったからなのです。「大切な人」は「仏様」になっておられることを私の心が証明しているのです。たいせつな人と再びこの世で会うことはできません。悲しみとは、ひきさかれる心といいます。再び会うことができない事実に心がひきさかれるばかりです。けれどもその心がある限り、浄土を求め続けることができるし、その心に大切な人は来ているのです。悲しみは忘れることができます。けれども無くなったのではありません。ふとしたことでよみがえります。そこに限りない仏様のはたらきを知ることができるのです。